

文部省からスポーツ指導者在外研修員としてスイスに派遣されていたバレーボールの荒木田裕子さんが、2年間の研修を終え、この10月に帰国しました。モンテリオール五輪で金メダルを獲得した経験に、英語、ドイツ語の語学力がプラスされ、さらに指導者としての技術を習得した荒木田さんの今後が、期待されます。

—むこうではどのような仕事をされていますか。

「西ヨーロッパのバレーボールに関する情報の収集が主な仕事でした。研修員の資格で行ったので、今回は指導していません」

—以前スイスにいらしたときと比べて、荒木田さん御自身、何か変わられたことがありますか。

「言葉が前回より分かるようになったので、行動範囲が広くなりました。そして、その分、世界は狭くなった感じがしました」

—むこうの人々が、日本人と違うと感じるところはありますか。

「日本人には本音と建て前というのがあり、また相手をたてるのが美德とされ、自分の意見をはっきり述べることはあまりありませんよね。ところが、むこうでは、自分の意見をはっきり述べなくては、コミュニケーションがうまくいきません。自分の考えを相手に伝えることが、相手のために

海外バレーボール事情を学んで、新しい“金メダリストOGの道”を探っています。

あらきだゆうこ 荒木田裕子さん

秋田県立角館南高校でバレーボール部のエースとして活躍。昭和47年、山田重雄監督の強い要請で日本リーグ名門チームの日立へ。オールラウンドプレーヤーとして全日本選手に選ばれ、49年の世界選手権、モンテリオール五輪で優勝。引退後、国際コーチの道を目指し共立女子短大英文科に入学し英語を習得。55年、日本バレーボール協会の派遣でバレー指導のためスイスへ。(同地で国際2級コーチの資格も取得) 29年、秋田生まれ。31歳。



▲コートを離ればピアノも楽しみます(スイス)

なると思うからでしょう。日本にいるときは日本人に、ヨーロッパにいるときはヨーロッパ人になりきるようにしています」

—外国から見ると、日本のバレーボールをどう思いますか。

「体力的には劣りますが、レシーブなどテクニクの間では世界のトップレベルだということがわかり、見直しました。しかし、長い伝統からくる経験に基づく指導だけでは、限界があるような気がします。欧米諸国のような科学的分析、生理学的研究などが必要な時期です」

—これからのご予定は。

「アマチュアの世界で働きたいということだけは決めています。具体的なことは何もかたまっていません。語学の必要性を非常に感じるので、イギリスに留学し、英語がうまくなるのが当面の目標です。また、将来は、自分の選手経験を生かして、スポーツジャーナリストのような仕事もやってみたいと思っています。その仕事を通して、多くのスポーツマンに出会いたいですね」

—月並みな質問ですが、ご結婚については、どうですか？

「独身主義者ではありませんから、いずれは結婚したいと思いますが、今しなくてはいけないというものでもないですから……」(聞き手「気賀恭子」)